慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	H.-F. IMBERT : LES METAMORPHOSES DE LA LIBERTE : ou Stendhal devant la Restauration et le Risorgimento (José Corti, 1967)
Sub Title	
Author	古屋, 健三(Furuya, Kenzo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1970
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.28, (1970. 2) ,p.112(37)- 116(33)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00280001-0116

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

H.-F. IMBERT: *LES METAMORPHOSES DE LA LIBERTE* ou Stendhal devant la Restauration et le Risorgimento

(José Corti, 1967)

古 屋 健 三

「自由の変貌，または王政復古とイタリア国家統一運動に対してのスタンダール」というタイトルを持つモンペリエ大学教授アンベール氏のテーズは600ページをこえる浩瀚な博士論文である。

まず驚くのはその資料が多彩なことだ。1814年から1830年にいたるこの極めて政治的な季節に書かれた数多い回顧録や日記の類，新聞・雑誌の定期刊行物や檄文，アルシーヴに埋れたまま放置されていた未発表の記録まで著者は渉猟している。こうした珍しい資料が露にする思いもかけない時代の翳りはそれだけで人を楽しませ，考えこませるのに充分である。しかし，ふと亢奮から目覚めて，『自由の変貌』というタイトルに思いをいたすと，この論文の焦点がどこにあるのか，はなはだ頼りなくなってくる。個々の資料やデテールばかりが浮き出して，それを方向づける強力な思考が不足しているように思われる。もっともこれは論文の主題の性質上やむをえない弱点ともいえる。論者の論証の一つが，いわゆるスタンダールの政治的無関心と呼ばれる態度が当時の政治情勢の中にあっては決して無関心と言ってかたづけられないという点にあるからだ。だが，論者自身好きになれないと告白しているように，たとえば，王政復古に際して，スタンダールが示した迎合的素振りとか，ナポレオンの百日天下に際しての傍観者的姿勢は，他方においてコンスタンの悲愴な参加があるだけに，なんと

しても弁護の余地がない。著者はその序論でスタンダールの政治上の態度が，究極するところ，時代の証人になることであり，透視者になることであったと述べている。またスタンダールがその理想とする政治体制の実現については，未来を待ち，時勢を頼むという態度であったという。そうだとすれば，こうした政治の実際の外に身を置いていた局外者にとって，自由がどれほどの重味を持っていたか，まずそんな問題から問われなければならないはずである。

論文は二つの部分からなっている。「スタンダールの政治エッセーを通しての自由の問題」と題された前半と，「自由の問題と小説の創造」という後半とである。

前半では，「ハイドン伝」や「ロッシーニの生涯」の音楽論，「イタリア絵画史」の絵画論，「ローマ，ナポリ，フィレンツェ」，「ローマ散歩」などの紀行録が主として分析され，スタンダールのフランスとイタリアの政情についての認識のほどが問われる。それに対し，後半はスタンダールの小説の分析に費やされている。ここではスタンダールが理想とする人間の生き方とはなにかが問われているようである。この前半と後半とでは，かなりな部分が乗りこえられたと言っていいある歴史的に限られた時代の喚起である前半よりも，われわれにとって永遠に身近かな小説の問題が扱われた後半の方が興味深い。しかし気になるのは，前半においてある与えられた体制下において政治的自由とはなにかを模索しているスタンダールの姿が追求されながら，後半になるとそうした状況を次元の違う個人的モラルで乗りこえてしまう登場人物達に照明があてられ，そうした人物達を創造する作家の姿がなおざりにされることである。前半の主題からすれば，後半は創作に没頭する作家にとって自由とはなにかという問題が問われなければならないはずだ。

論文は1814年から30年までのスタンダールの態度のみを問題にしていて，それ以前のスタンダールも7月王政下の官吏としての生き方も等閑にふされている。この欠落の理由として論者は歴史それ自体が自由の探求である以上，その自然な流れに反する王政復古時代に注目することこそ意味

があると述べている。だが，主としてイデオローグの影響を受けながら自己形成をはかっていたスタンダールの青年時代と，体制にくみした7月王政時代とは，それこそその自由の概念の変革を見るうえに二つの重要な時代ではないであろうか？

1814年王政が復古されると，この反動体制に対しスタンダールは組織的な抵抗を試みることもなく，かといって積極的な支持を与えることもなく，ただ権力を握った王と貴族とに対し時代が変わったことを考慮に入れ，慎重に順応するように求めただけだという。政治におけるスタンダールのこのように極めて実際的な態度は実は彼の生涯にわたって貫かれる態度である。彼の最切の著作「ハイドン伝」を繙けば，すでに政治がスタンダールにとって一義的問題でないことが明らかとなる。すなわち政治は人生において相対的な位置を占めるものでしかなく，幸福の真摯な追求こそが人間にとって真に価値のある唯一の行為であるというモラルが説かれているからだ。この場合幸福であるとは己自身になりきることを意味し，スタンダールが体制を批判するのはこうした幸福が阻害されている場合に限られる。しかし，こうした批判はやはり政治批判というより，むしろ文明批判として受けとめるべきであろう。次作「イタリア絵画史」においては，ミケランジェロを好む心がふたたび蘇るであろうという予言が語られ，しかしそのためには長い才月を待つ覚悟が必要であるという感想が述べられているところから，この書は孤高な芸術家の生き方を認めない体制に対しての痛烈な批判であり，したがってもっともたくみに偽装された政治批判の書であると論者は指摘する。これはスタンダールの著作をなんでも政治的に解釈したがる最近の傾向の極端な一例である。。「ローマ・ナポリ・フィレンツエ」(1817年版）が扱われている章は，イタリアの王政復古の情勢が詳しく分析・紹介されていて，興味深い。とりわけ当時のフランスやイタリアの新聞・雑誌などの記事が多くそのまま引用されていて興趣つきない。だが，それだけにそうした一，二の断片から一般的な趨勢が帰納される二，三の個所には大きな不安を抱かざるをえない。論者はこの旅行記をイタリアの現状分析書ととり，スタンダールは正確な診断書を

呈示することによってはやりがちな革命家に待つことと適確な革命の方法をたてることとを警告したと解釈している。「ロッシーニの生涯」はこうして隠忍自重する革命家の心に音楽が与える慰藉と力とを叙述した書だという。しかし，これも一面的な解釈で，ロッシーニの陰影の薄い音楽が革命家の心を逆に麻痺させなかったという確証はない。論者が政治現象ばかりに眼を奪われ，たとえばスタンダールの情熱の理論書ともいうべき「恋愛論」などの分析を怠っているところから，こうした解釈の浅さと弱さとが生まれるのではないだろうか？

エッセーから小説の世界に入っても論者のこの視点に変わりはない。たとえば「アルマンス」の最切のサブタイトル「19世紀小話」に注目し，この小説の主人公達が彼らの私的なドラマを生きることともに，時代の証人として選ばれていると指摘している。この観点から小説に影を投げている幾つかの政治問題が詳しく解明され，さらに一見政治とは無縁にみえる自殺の問題が実は当時の賑々しい社会問題であった事実などが紹介される。つまりオクターヴの自殺は無益であることの自由しか持ちえない貴族階級の悲しい自己表現だというわけである。こんな風にして論者は「ヴァニナ・ヴァニィニィ」の小説としての未熟さにローマ人の政治意識の低さの反映を認め，「箱と幽霊」の息苦しくなるような雰囲気にスペインの専制主義の暗影を見ている。

こうした方法論は「赤と黒」を論じた最後の部分になって，いろいろ興味深い問題を明らかにする。たとえばこの小説の第一部がフランシュ・コンテを舞台としているのはそこがイエズス会の暗躍した地方だからであり，またその地方の行政官である町長が登場するのは中央集権の結果実権を失った地方行政の骨稽な姿を描き出すためだという。また第二部のド・ラモール侯爵を中心とする貴族階級の動きも当時の史実に照らして明確に方向づけられている。しかし，もちろん論文の焦点はこの小説の中心人物ジュリアンにしぼられていて，大胆な仮説が提出される。たとえば，ジュリアンが行為の外的な軌範としたタルチュフ流の偽善について，氏は王政復古時代このモリエールの芝居の改作が数多く上演された事実を指摘し，

タルチュフが当時アクチュエルなタイプであったことを明らかにして，それらのイメージにジュリアンを重ねている。つまり，アンベール氏の見方は，あくまで現象的で，スタンダールが青年時代よりモリエールを意識し続けてきたという事実を無視する。ところでジュリアンは偽善が時代にかなった武器であるから，身につかないながら用いるのであって，体質的な偽善者であるタルチュフとは本質的に異るというのがその結論である。それではジュリアンとはいったい何者か？　ここで論者は思いもかけない歴史上の二人物を引き合いに出してくる。一人はイエス・キリスト，いま一人は背教者ユリアヌス帝である。イエス・キリストについては，その生まれがイエスもジュリアンももとはたかが大工のせがれと噂されるような身分だからであり，また両人の偽善の徒パリサイ人に対する孤独な闘いぶりと，「この世にはもはや私のなすべきことはなにもない」という最後の感懐とが相似しているからである。ユリアヌス帝の場合は，その名がジュリアンのラテン語名であること，「特異な」人格の類似と自分を理解してくれない周囲とのやはり孤立した闘い，このローマ時代が王政復古時代と多くの共通点を持っているためしばしば当時の新聞に引用され，「赤と黒」にも大きな影をおとしているなどの理由からである。以上結論すれば，スタンダール作中人物の生き方とは自由を手に入れるための孤独で絶望的な闘いであり，他方作者は政治上の絶対的自由を理想の形で未来に夢見ていたということらしい。

この論文の面白さは資料の珍しさと豊かさにあり，論理の展開という点ではやや緻密さに欠けるところがある。それは，この論者がスタンダールの世界をそれ自身で完結した統一体として捉えずに，一つの実像と解し，ひたすらその光体を追っているからであろう。だが，文学とは，言うまでもなく，その妖しさこそが生命の虚像なのである。